

多文化共生のための視聴覚メディアを活用した地域日本人への情報発信の検討

Consideration of Information Diffusion to the Regional Japanese by Using the Audiovisual Media for Multicultural Symbiosis

竹上 瑞穂

Mizuho TAKEGAMI

宇都宮大学大学院国際研究科

Graduate School of International Studies, Utsunomiya University

Email: mt1106a@gmail.com

あらまし：今日、多くの国からの外国人が多数日本で生活している。これまでの地域日本語教室による日本語指導だけでなく、地域社会における多文化共生への取り組みが必須となっている。筆者は地域に在住する外国人と日本人とのコミュニケーション構築に着目し、これまでに、群馬県玉村町で在住外国人による日本語スピーチの会を開催、そのスピーチの映像を編集し、映像情報として地域に在住する日本人へ情報発信するという手法による異文化相互理解を支援する取り組みを検討している。本報では、実践結果に基づいて支援の状況を報告する。

キーワード：異文化相互理解、多文化共生、地域日本語教室、映像媒体活用

1. 研究背景及び目的

地域社会における外国人在住者に対し、生活や日本語習得の支援を行う団体の一つに「国際交流協会」があり、その活動の一つに「地域日本語教室」がある。地域日本語教室は各地域における外国人と日本人との交流拠点や異文化相互理解の発信拠点の役割を持つとされているが、地域日本語教室の活動実態は在住外国人への日本語指導である「学校型日本語教育」が中心になってしまっており、多文化共生に向けた相互理解活動である「社会型日本語教育」の現状は芳しくない現状がある。また、異文化相互理解や多文化共生の地域全体への展開や浸透させる活動はさほど多くなく、「地域社会の多文化共生」は多くの課題が残されている。

本研究では地域日本語教室の活動において地域に向けた活動である「日本語発表会」の活動に着目し、発表会を映像メディアを用いて支援すると共に、発表会の映像を地域に発信することで地域社会の多文化共生の拡充について検討するものである。

2. 在住外国人支援に関する先行研究

池上（2007）は、行政が主体的に果たすべき地域日本語教育支援活動を地域のボランティアが肩代わりして行うことで、行政の対応の遅れを招いているという矛盾を「ねじれ」と称して、専門家の役割をもボランティアが担っている状況を指摘し、社会型日本語教育が遅れる要因の一つとしている⁽¹⁾。

米勢（2006）もボランティアに対する役割過多として、教室の活動目的の対にあたる異文化相互理解や多文化共生を目的とした交流活動の形骸化について論じている⁽²⁾。また、支援は言語支援にとどまり、日本語教室はあくまで特定の在住外国人と特定の在住日本人同士が交流している場で、限定的空間内だけの多文化共生に留まり、地域全体への反映、浸透は芳しくはない。

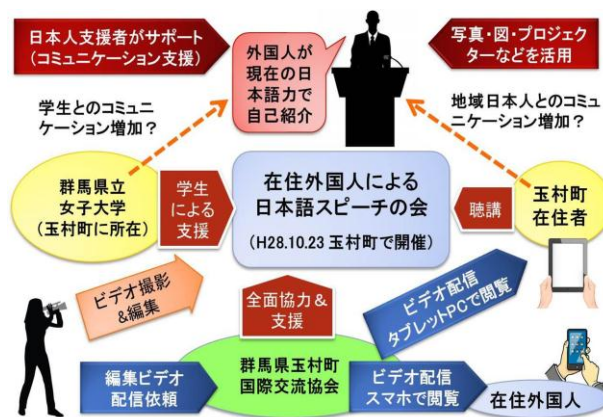


図1 在住外国人による日本語スピーチの会概要

3. 在住外国人による日本語スピーチの会

日本語教育からスタートしていた在住外国人支援と並行して、日本における生活支援、異文化相互理解、多文化共生を目指し「在住外国人による日本語スピーチの会（開催名：玉村町に住む外国人の日本語発表会）」を企画、実施した。図1に、在住外国人による日本語スピーチの会概要を示す。これは、群馬県玉村町国際交流協会主催で、平成28年10月23日（日）に玉村町勤労者センターで開催されたもので、在住外国人のすでに備わっている日本語能力や学習能力を活用して、地域社会とのコミュニケーション向上を目的としたものであり、群馬県玉村町の地域日本語教室に通っている在住外国人16名が、地域住民を前にして、日本語で自己紹介などを行ったものである⁽³⁾。

4. 多文化共生のための映像媒体の活用

佐藤（1997）は、コミュニケーション情報の提示という観点から、①視覚・聴覚情報を伴うため、語学力が不十分での内容把握が容易である、②短時間で大量の情報を伝達できる、③臨場感があり、登場

人物の立場から物事を考えることが容易になりやすい、④一つの場面を視覚イメージとして共有でき、共通の土台に立っての考察が可能、と大きく4つの利点を述べている⁽⁴⁾。

4.1 プロジェクター投影によるスピーチ支援

日本語スピーチの支援として、スピーチの際には、プロジェクターを利用して、スピーチ内容に合った図や絵や日本語を投影して聴講者の理解支援を行った。また、発表者のスナップ写真も映し、母国での生活の様子なども紹介した。

4.2 地域の人々への情報発信を目的とした映像編集

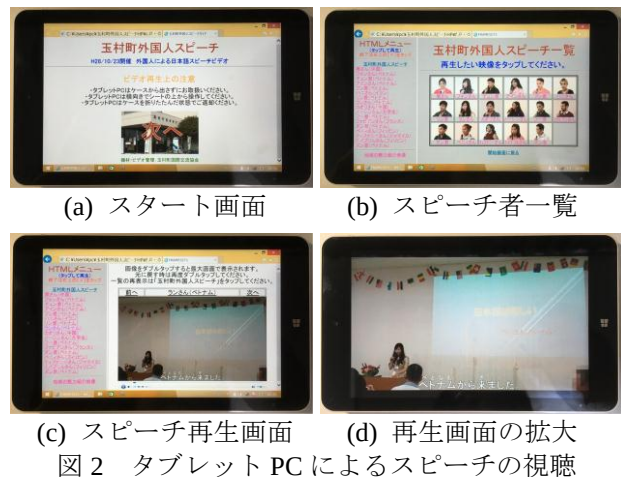
スピーチの状況は、①在住外国人について理解を高めてもらうための日本人地域在住者への情報発信、②日本語スピーチの会のことを知ってもらうための地域在住外国人への情報発信、③スピーチした在住外国人学習者の日本語スピーチの振り返り資料として、ビデオ編集を行っている。編集に際してはタイトルやクレジットに発表者名、テーマ、開催場所や日時などの情報を含ませ、外国人学習者の日本語学習支援を前提として、漢字・カタカナに振り仮名を振った日本語字幕を表示させている。

4.3 地域在住者を対象とした編集ビデオの上映

スピーチビデオの編集後、プロジェクター投影によるビデオ上映会を玉村町で開催し、上映会後にアンケートによる評価を行った。スピーチしなかった者を含む外国人11名と日本人スタッフ13名の回答結果はほぼ同様の傾向にあった。結果を大きくまとめると、①映像があると内容が分かりやすい、②日本語発表会を継続して行くと、外国人・日本人のコミュニケーションが増えると考えられている、③スマホやパソコンなどで日本語の勉強をしたい、であり、スピーチの会開催や紹介ビデオ視聴などを継続できれば、外国人・日本人のコミュニケーションが増大できる可能性が確認できた。

4.4 DVD・タブレットPCによる個別情報配信

ビデオ上映会とは別に、DVDやタブレットPCを用意して各家庭でもビデオ視聴を行ってもらった。図2に、タブレットPCによるスピーチの視聴を示す。これは家庭に映像再生装置がない方々へ対応したもので、タブレットPC10台を用意して日本在住者に貸し出した。電源投入後しばらくすると、図2(a)のスタート画面まで自動的に進み、注意書き確認後に「次へ」をタップすれば、(b)のスピーチ者一覧が表示される。視聴したい発表者の写真をタップすれば、(c)のスピーチ再生画面のように、スピーチ映像が再生される。このとき映像を2回タップすれば、(d)の再生画面の拡大に示すように、画面全体での映像再生となり、再度2回タップすればもと画面に戻る。操作支援のため簡単なHTMLで動作させているが、高齢者には操作の理解が難しいようであった。アンケート評価の結果、視聴方法によるスピーチの理解度への影響はほとんど無いと判断され、映



(a) スタート画面 (b) スピーチ者一覧

(c) スピーチ再生画面 (d) 再生画面の拡大

図2 タブレットPCによるスピーチの視聴

像情報であることが理解度向上へつながることが確認された。また、DVDやタブレットPCなどでの視聴は自由な時間で視聴できることが、情報へのアクセスしやすさの点で優位という結果も確認できた。

5. まとめと今後

在住外国人による日本語スピーチの会では、その時だけでなく、開催後にも編集したスピーチ映像を視聴してもらうことで、外国人在住者の日本における状況を日本人在住者が知ることができ、在住外国人への支援を考えるようになったことが確認できた。視聴の効果は映像を再生するメディアの違いの影響は少なく、映像として視聴できることが最大の要素である。とはいえ、高齢者にとってはタブレットPCの操作は苦手なようであった。編集したスピーチ映像には振り仮名付き日本語字幕を映像下部に固定表示させ、外国人の日本語理解向上にも配慮し、地域の外国人学習者や留学生対象の日本語学習にも活用できるものである。今後は、今回編集したスピーチ映像を活用して近隣地域の日本語教室にも情報発信を行い、一つの国際交流協会だけでの閉ざされた活動から地域を拡大した多文化共生を目指していく予定である。

参考文献

- (1) 池上摩希子:『地域日本語教育』という課題, 早稲田大学日本語教育研究センター紀要, 第20号, pp.105-117 (2007)
- (2) 佐藤勢紀子:『異文化教育における映像教材の利用法:外国人の日本文化適応のために』, 放送教育開発センター研究紀要, 第14号, pp.1-20 (1997)
- (3) 竹上瑞穂:『地域社会の異文化交流拡充を目的とした、視聴覚メディアの活用と情報発信に関する研究—玉村町国際交流協会の地域日本語教室での実践例—』, 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報, 第9号, pp.69-82 (2017)
- (4) 米勢治子:『地域日本語教室』の現状と相互学習の可能性—愛知県の活動を通して見えてきたこと—, 名古屋市立大学院人間文化研究科人間文化研究, 第6号, pp.105-119 (2006)